「暁月夜」覚書

青木一男

一　執筆依頼から脱稿まで

樋口一葉の『暁月夜』は、明治二十五年十月二十二日に金港堂[1]の編集者藤本藤陰から依頼され、翌年二月十九日発行の『都の花』（一〇一号）に発表された。

一葉はすでに萩の舎[2]の先輩田辺花圃[3]の紹介で、『都の花』に「うもれ木」[4]を執筆し、九月十五日に脱稿。即日田辺邸[5]に持参して、花圃経由で『都の花』編集部に寄稿している。「うもれ木」の原稿を見た藤本藤陰は一葉の文才を認めたのであろう、十月二十一日、一葉が上野の図書館[6]へ行っている留守に一葉宅を訪れ、「うもれ木」の原稿料十一円七十五銭を送ったこと、また、「猶たのみ度ことあるよし」[7]を言い置いて帰っている。早速、一葉は翌二十二日に人力車で猿楽町の藤陰宅を訪ね、初めて対面した。藤陰は、「『都の花』明年の初ずり付録に、松竹梅の三幅対を田辺君及び我[8]と外一人の婦人に著作し貰ひ度し、依而花圃女史にも依頼なしたるに『何れ考へて』とのこと也しが、何とぞ相談の上に、両君にて一ツヅツ題を定め給はり度し、其残りたるを佐々木竹柏園[9]か坪井秋香[10]か廻すべければ」ということであった。こうして、一葉は新作の依頼を受けたのである。しかし、この二十六年の年頭の『都の花』への寄稿は実現せず、二月になって『暁月夜』の発表となったのであった。

藤陰に会った翌々日の二十四日、一葉は花圃を番町の屋敷に訪ねている。『都の花』の礼を述べるためであったろうと和田芳恵は書いているが、[11]新作依頼のことも話したかったのであろう。しかし花圃は不在で花圃の母君[12]と話して帰宅している。

十一月に入って九日に萩の会の納会があったが花圃は不参で、田中みの子にことづけの文があった。花圃は二十日に嫁ぐので、十五日前に会いたいとのことであった。花圃の都合を問い合わせると、十一日か十三日がいいとのことであった。一方、一葉は交際を遠慮させられ

ていた半井桃水[13]に会いたいという気持ちがあったが、母も妹も許してくれないでいた。ところが『都の花』に「うもれ木」が載ることになったので、『武蔵野』[14]で世話になった桃水にこのことを告げたほうがいいと母の方から言うのだった。「龍子さんの所へ行く途中に寄ればいい」と妹の邦子も言ってくれた。十三日は日曜で桃水宅には友人が集まるだろうと考え、十一月十一日に行くことにきめた。

一葉はまず花圃を訪ねた。彼女は三宅雄次郎（雪嶺）[15]との結婚を前にしていた。『都の花』の付録のことがまず話題になった。花圃は新年の付録ということさえ花々しいのに女ばかり三人など目立ち過ぎる。三宅は派手なことが嫌いな質だから、あなたと私二人合著でどこからか出版しようなどと話し、「金港堂ならで春陽堂[16]にてもよし。何かお作はなくや」と聞いてきた。一葉は「我れ例の遅筆なれば、是れぞとおもふものもあらず。されどかねてものしかけしが、しばしにてまとまらんとするを、あはれ諸ともにせさせ給はゞ嬉し」などと答えている。ここで「かねてものしかけしが、しばしにてまとまらんとする」作品と言っているのは、後に「暁月夜」となる原稿を指しているのであろうと考えられる。十月六日まで「経つくゑ[17]」を書いていた一葉が、二十二日に藤陰から新作の依頼を受けた後、十一月十一日に花圃に逢うまでの間にもうすぐまとまる別の作品があったとは思えない。

一葉は昼食をふるまわれて、午後二時過ぎ花圃邸を辞し、桃水のもとへ向かった。人力車上で寒風に吹かれながら萩の舎の師友に騒がれて心ならずも桃水との交際を断ったことを悔い、今更取り返しがつかぬと思い、また「はじめよりにくからざりし人の、しかも情けぶかうおもひやりのなみ成らざりしを」などと思うのだった。桃水の家は三崎町の新開地の町外れ[18]にあって、五、六人の人を使って松濤軒という葉茶屋を経営していた。一葉は店と仕切られた部屋で桃水と対面した。一葉は「うもれ木」が『都の花』に載ったことを話した。桃水は「そはいとよき事成りかし」と言い、どこへでも執筆していらっしゃれば喜ばしいことだと言った。そして、明治女学校[19]の教師何某という人が「我が『むさし野』へ君のこと頼みに来たり。『女学雑誌』[20]に執筆ありたしといひたれど、さしつかへおはします頃にて、しばし筆とり給ふことあたふまじと断りたるは、我が僭越の所為成けん。もしこれに出したしなどのぞみ給はば、いつにもあれ申給へ。我れ其人に紹介し参らせんに、すこしも君が名のけがれに成るべくも非らず」と語った。ここでいう明治女学校の教師とは星野天知[21]ではないかと推測される（が、定かではない）。

桃水の店は華やいだ新開の町にあり、特に磨きをかけて作られた葉茶屋なので客も多く、桃水は病後でやつれているようだが、客が来ると自分も店に立ったりしていた。一葉は、あたりに人のいないのを見て、「何は置て、御めにかかることのいとはるかなるが口をしうこそ。何事もうき世に申合す人なき様にて、心ぼそさ堪がたし」と言うと桃水は「何かは我などの御助けにも成る節あらんや。されどもしこゝに申ことありとも覚さば、此うら道のいとさびしく、人めといふものふつにあらねば、此処より立寄給はんに誰か見とがめ申べき」とささや

いた。「いでや、其しのびたるたぐひを厭へばこそ、こゝにかく心くるしきを」と心中に思い、「何も〳〵残したる様に」思いつつ桃水宅を辞した。

一葉の日記は、この日から十二月七日まで飛んでいて、この間の消息を探るわけにはいかない。いったい一葉は何をしていたのか。花圃は結婚早々で小説どころではなかったかもしれないが、一葉の方は、藤本藤陰から依頼された小説（暁月夜）の完成にあたっていたと推測することができよう。

現在、十一月三十日付の花圃からの封筒が残っている。中の手紙が残っていないので内容は不明であるが、「『うもれ木』の書評を兼ねて『都の花』の新年付録に触れたものではなかったろうか。一葉は『暁月夜』を新年付録に発表するつもりで完成させていたか、或は完成に近い状態まで制作を進めていたが、花圃のこの手紙を見て新年付録への寄稿を見合わせたのであろう。」と野口碩氏が解説[22]しているのは穏当な推測である。

十二月七日に桃水から、『朝日新聞』に連載していた『胡砂吹く風』を一冊にまとめて出版するので和歌を一首お恵みいただきたいと手紙が届いた。一葉はすぐに小説の主人公林正元を詠んだ歌を作った。二十日になって、桃水の弟龍田浩が歌を受け取りに来て、少し話をした。出した菓子を浩は快く食べた。帰るとき一葉の母がお兄さんへと言って菓子を包んで渡したが、一葉にはそれがたまらなく嬉しかった。

龍田浩が来た日から四日間後の十二月二十四日の日記には、師走の二十四日にもなったが餅もつけない、家賃をどうしようなどと生活苦を綴った後、「『暁月夜』」の原稿料いまだ手に入らず」とある。「うもれ木」も九月十五日に脱稿し、すぐ送稿しながら十月二十一日になって原稿料を送られていることからも、「暁月夜」の原稿もかなり前に編集者藤陰の方に送られていたことが推測される。したがって、関良一氏が「暁月夜」の成立は「十一月内か十二月早々からであろう」と「一葉小説立考」[23]で述べているのは妥当であろう。

二　物語と登場人物

江戸川の西べりに従三位香山という華族の屋敷があった。香山家の中の娘一重は姉妹に勝る美女であったが、どうしたわけか二十歳になっても一生一人住みの願いがあると言って嫁ごうとしない。噂を聞いた文学書生の森野敏は彼女に興味を抱くが、屋敷の門前で一重を一目見て恋の虜となり、学校を休学し、名を吾助と偽って香山家に庭男として住み込んだ。そして、腕白だか一重と仲が良い九歳の次男坊甚之助を手なづけて恋文を届けさせるのだが、一重からはいっこうに返事はなく、そのうち一重は鎌倉の別荘に引き籠もることになった。その前夜、敏は一重の部屋の軒下で中の様子をうかがっていた。一重は敏の恋文を抱いて泣いていた。やがて夜風に吹かれ二十日月を眺めようとして戸をあけようとした敏は一重をとらえて、恋の告白をする。一重は部屋に招き入れ、わが身の生い立ちを語る。一重は香山家の娘として育てられてきたが、実は、生母は当主の妹花という姫君で、亡

き両親の最愛の形見として当主となった兄に大切に育てられていた。その花が十六のとき馬廻りの六三（ろくさ）という美男と恋仲となってしまった。江戸時代の諸藩で馬廻役と言えば、主君の乗る馬の回りを警護する騎馬武者のことで、いわば主君の側近に侍る名誉の職であった。しかし、「暁月夜」に描かれた馬廻りとは主人の乗馬の世話をする下僕程度の身分の者と見る向きも多い。ただ、一重の両親が恋し合ったのは明治初年のことと推測されるので、六三は明治維新前から花姫の兄である若殿の側近に仕えていた若侍であり、若殿と年も近くて信任され、明治維新後藩士たちが主家を離れた後も止まって、当主となった花姫の兄に仕えていたのであろう。そういう立場であった者だからこそ、主君の妹君とも接する機会があり恋仲にもなったのであろう。しかし、体面を重んずる華族としては身分違いの恋は許されないことであった。当主である兄、江戸時代なら七万石の殿様が手をついて家の名を惜しみ、可愛い妹の身を思って六三を屋敷から追放した。花姫は恋人を失った後に妊娠に気づき、「親は玉とも愛（めでたま）給びしに、瓦におとる淫奔（いたづら）恥かしく（中略）今は人にも逢はじ物も思はじ、唯死ねかしと身を捨てものにして、（中略）先祖の恥辱、家系の汚（けが）れ、兄君に面目なく人目恥ずかしく」と自分を責めるうちに、月足らずの一重を生み落とすと亡くなってしまった。これを伝え聞いた六三も大川に身を投げてしまった。こうした悲しい過去から一重は恋を捨て、浮き世を捨てるのだと覚悟のほどを敏に言い聞かせる。暁の月光の下、一重と森田は別れるが、その後の二人がどうなったかわからないというのが「暁月夜」の梗概である。

登場人物は、従三位香山子爵家の美しい令嬢一重、二十歳。次女として大切に育てられているが、実は当主の妹の忘れ形見である。腕白な九歳の弟（実は従弟）甚之助から他の姉以上に慕われている。そして彼女を慕う文学書生森野敏。学校も休学し、吾助と名を変えて庭男になって住込み、一重に思いを訴えようとするほどの恋の奴。しかし、一重の告白を聞くと、暁の月を眺めて恋を諦めざるを得ない男である。それだけ、一重の両親の恋が切ないものであったと言える。

一重の両親は身分違いゆえに悲しい恋に殉じている。香山家の当主、すなわち一重の伯父は、現代なら旧弊な分らず屋と評価される人物だが、当時の人として見ればかなりの温情家であった。二人の仲を知ったとき、お家のご法度ということで首を撥ねられる覚悟をした六三に対して、物柔らかに家の体面を重んじ花姫の身を思って屋敷を立ち退いてくれと因果を含め、金まで与えて別れさせようとしている。大名華族の当主とは思えぬ情に厚い人として描かれている。花姫の没後は実の娘と変わりなく一重を育てていることにも人柄が現れている。

三　一重とその心情

一重は実の両親はいないが、当主である伯父からは愛する妹の忘れ形見ゆえにわが子として慈しまれている。恵まれた境遇の娘である。しかし、結婚を望まず一生一人住みを願っているところは、一葉作品の女主人公の系譜としては「谷中の美人系」[24]に属する女性と見られる。

「暁月夜」までに書いた「たま襷」の青柳糸子、「五月雨」の梨本優子・お八重、「経つくゑ」の香月園なども同様である。

ついで、一般の娘と違って生涯独身を願うに至った一重の心情を作品の流れに沿って確認してみよう。第一回で両親（実は伯父夫婦）が嫁入りの話をしても「我まゝながら私一生ひとり住みの願ひあり。仰せに背くは罪深けれど、こればかりは」と断り続けていることが述べられている。こういう噂を聞き、どんな娘か真実を探りたいと興味を持った文学書生の森田敏は一重を見て恋の奴となり、庭男と住み込んでしまう。初めは一重を「数珠などを振り袖の中に引きかくし、経文の読誦に抹香くさくなりて、娘らしき匂ひは遠かるべし」と想像していたのだが召使にも優しい言葉をかけ、柳髪をいつも高島田に結って後れ毛一筋乱さぬたしなみ、束髪さしの花一輪も愛らしい姿であった。次男坊で末っ子で九歳になる甚之助は他の姉たちをさしおいて一重を慕って仲良くしている。その甚之助に「大姉さまもその外のお人もそれぞれ片付て、人の奥様になり給ふ身、私にはお兄さまとお前様ばかりが頼りなれば、誰よりも私はお前様が好きにて、何卒いつまでも今の通り御一処にをりたければ、成長くなりてお邸の出来し時、かならず伴なひてお茶の間の御用にても為せ給へ」と一重が話しかけると、甘えて抱かれながら甚之助は僕が大将になってお邸ができさえすれば姉様を連れていって御馳走をする、他の姉さんたちは僕を可愛がってくれないから内へ入れてやらないなどと答えている。ここまで読んできて読者は、一重は普通の令嬢同様身嗜みも整え、気立ても良く、優しい人柄なのに、生涯独身の意志を固めていることをはっきりと知る。そして次にはその理由が知りたくなる。その謎解きが森野の役割となってくる。森野は一重と仲良しの甚之助の遊び相手になって親しい関係を作った上で一重に恋文を渡して貰うのだが、何度恋文を送っても返事はなく、ついにはお返事がいただけなければ、若様ともお別れしなければならないと甚之助を責める。甚之助から責め立てられた一重は「山賤にせよ庭男にせよ、我れを恋ふ人世に憎くかるべきか、令嬢の情緒いかに縺れけん。甚之助母君のもとに呼ばれ、この返事を聞く間無く、残り惜しげに出行たるあとにて、玉の腕に此文を抱き、胸に当てゝ夜もすがら泣きけり」というありさまであった。一重も決して恋心を解さぬ木石ではなく、何か理由がある筈であった。結局は前述のように実父実母の悲恋を思い「咲かぬ桜に風は恨まぬ独りずみの願ひ」を固めたのであった。そして、鎌倉へ出立するという前夜、一重のもとに忍んで行った森田に身の上を告白し、「行末いかに御立身なされて、如何様なお人物になり給ふお身にや。思へば尊とき御勉強ざかりを我れなどの為めにとは何事ぞや。いよいよ恋は浅ましきもの果敢なきもの憎きもの。我が生涯の此様に悲しく、人に言はれぬ物を思ふも、浅ましき恋ゆゑぞかし。我には有らぬ親の昔、語るまじき事と我も秘め、父君は更なり母君にも家の恥とて世に包むを、聞かせ参らするではなけれど、一生に一度の打ち明け物がたり、聞いて給はれ、憂き身の素性」と身の上を語るのであった。

一重は人並みの心を持った娘ながら、実の父母の悲恋を思い、生涯

独身を守ろうと決心しながら、自分を恋して庭男にまで身をやつした青年に出会い、両親の恋と似た身分関係の恋に悩むものの、自分の恋を淫奔と恥じ、先祖の恥辱、家系の汚れ、兄君に面目なく、人目恥ずかしと思いつつ亡くなってしまった母のこと、身分違いゆえに恋を実らせられなかった父の恨みを心に重く受け止めていたため、本意のとおりの道を選んだというのである。「恋は浅ましきもの」という恋愛観を一葉自身も抱いていており、恋愛や結婚に夢を持てないでいた一葉の心が反映されていると言えるであろう。

四　先行作品との関係

先行作品の影響については、幸田露伴の「対髑髏」[25]との関係は平田禿木氏[26]や笹淵友一氏によって指摘されている。笹淵氏はこの作品は「対髑髏」の翻案ではあるが、「露伴に追従しようとしながらも追従し了せない一葉の資質を示すもの」[27]と論じている。

また、尾崎紅葉からの影響を指摘するものもあり、岡保生氏は『薄倖の才媛樋口一葉』[28]の中で、

わが母のあやまちを二度と繰り返すまいとする娘のあわれはそれなりに読者に訴えられてはいる。が、近世の因果物語めいていて、そらぞらしさを与えることも事実だ。それに、事情は異なるが、こういう結婚をいとい続ける美女といえば、すでに露伴の「対髑髏」（明治二十三年）や紅葉の「巴波川（うずま）」（同年）のような先行作品がある。（中略）

山根賢吉氏は、この作に「此ぬし」（明治二十三年）の投影を見、藤井公明氏は、その文体・表現から「恋の蛻（ぬけがら）」（同年）の影響を指摘した。両氏に追随していえば、第一回、人力車上の一重を追跡する敏に「拈華（ねんげ）微笑」（明治二十三年）の主人公の風貌を見いだすこともできるだろう。

同じ『都の花』に発表した前作の「うもれ木」がいわば露伴調だったとすれば、一葉がつづく「暁月夜」では紅葉作品を参考としたということも、じゅうぶんありうる。

と述べている。

一葉は一般大衆を対象とする商業文芸誌に小説を発表するに当たって、読者層の要求がどのようなものであったかを人気作家の作品から汲み取っていたことも想像にかたくないところである。

五　悲恋小説の延長

樋口一葉の親友伊東夏子の母延は「ひなっちゃんの小説は一つもめでたし〳〵で終わるのが無し、歌は気になるのを詠むしと八の字をよせて」[29]いたというが、一葉の作品で主人公が幸せになるという作品はまれである。しいて言えば、孤児になって心が捩じれ悪党になった渡辺金吾という少年が、神無月のある夜一人住みの森江しづの弾く妙なる琴の音に心が浄化され真人間に再生するという内容の「琴の音」（明治二十六年十二月発表）、真面目な職工の妻となり乳飲み子まであるお袖は、以前桜町家の小間使として仕え殿の寵愛を受けていた。

結婚後も殿が忘れられないし、殿からの手紙も来るが、読みもせず葛籠に入れておいたが、ある月の夜、夫の帰りの遅いときに出して読み、にわかに笑って焼き捨てて、殿との思いを絶つという内容の「軒もる月」（二十八年四月発表）、裁判官の妻になった実子は夫としっくりいかず離縁を望んでいたが、生まれて間もないわが子の無心な笑顔を見ているうちに夫婦の仲もうちとけ、平和な日常を取り戻すことができ、この子を守り神のように思うという内容の「この子」（二十九年一月発表）くらいである。これらは小品で、しかも主要作品とは言えないから、一葉には真に幸せな恋愛や結婚を扱った作品はないと言ってもよろしいように思われる。

一葉が「暁月夜」以前に書いた作品を振り返って見てみよう。

1　闇桜　（明治二十五年三月発表）　中村家の娘千代は隣家園田家の息子良之助と兄妹のように仲良く育つが、友達に二人の仲をからかわれて恋を意識し、打ち明けられずに悩んで衰弱死する。

2　たま襷　（明治二十五年四月発表）　明治維新後、両親を亡くした青柳いと子は親の代からの忠臣松野雪三を頼って生きている。ある日いと子は竹村子爵の次男緑と顔を合わせ、ともに恋心を抱く。竹村家からは人を介して求婚してくる。松野はそれまで忠臣に徹しようとしてきたが自制心を失い、いと子の夫となるのは自分だと言って縁談を断ってしまう。これを知ったいと子は二人の愛に悩み死を決意する。

3　別れ霜　（明治二十五年四月発表）　東京内神田の呉服商新田家の一人娘のお高は本家松沢家の一人息子の芳之助と許婚の間柄であったが、お高の父運平は本家を陥れ破産に追い込む。二人の仲は絶たれ、芳之助は人力車夫に身を落とす。芳之助はお高や運平を恨むが、偶然彼の引く車に乗ったお高は心情を語り、二人は愛を確認する。その後お高は松沢家の陋居を尋ね芳之助の両親に自分の父の仕打ちを詫びるがゆるされず、二人は両家累代の墓前で心中をはかる。芳之助は死に、お高は助かる。一人助けられたお高には監視がつけられるが七年の後、監視の目を盗んで自殺する。

4　五月雨　（明治二十五年七月発表）　梨本優子は十九歳で富豪の娘。父親と親しい杉本三郎という二十四歳の青年を恋している。侍女のお八重は十七歳、幼馴染みの恋人がいたが、彼は上京して音信不通。彼の後を追って上京したお八重は偶然優子に助けられ、忠実な侍女として仕えている。そして優子の恋を助けようと誓うが、優子の恋人こそお八重の初恋の人であった。お八重は優子のためにわが恋を捨てようとするが、それに気づいた三郎は二人の前から姿を消す。五月雨のころ二人はそれぞれ煩悶の日々を過ごすが、気晴らしにと出掛けた野道で二人が見たのは雲水に姿をかえた三郎であった。

5　経づくゑ　（明治二十五年十月発表）　医科大学[30]の助手の松島忠雄は学才もあり人柄も男ぶりもよい二十七、八の医学士。数

ある縁談にも耳を貸さず、旧幕臣であった父の友人香月左門の娘で、今は両親も亡く乳母と二人暮らしの園の世話をしている。世間では二人の仲を悪く言う者もいたが、松島は自分の理想とする教育を園に施しているのだった。しかし、十六になっても園は松島を嫌い、碌に口もきかない。そんなとき松島は急に札幌の病院長となり赴任して行った。松島が遠くへ行ってから園は松島への思いを募らせるが、その秋、松島はチフスに感染して急死してしまう。園は一人経机に香を絶やさず毎日を過ごすのであった。

6

うもれ木（明治二十五年十一、十二月発表）　薩摩焼陶器の絵師入江頼三は、時流に乗らず軽薄な明治の芸術に悲憤慷慨しつつ、赤貧の中で一世一代の名品を作ることを目指している。美しい妹のお蝶はその兄を支え、娘らしく着飾ることもせず苦しい所帯をやりくりしている。ある日兄妹は、篠原辰雄という立派な紳士に会う。彼はかつて師を裏切り逃亡した頼三の弟弟子であったが、今は巨万の富を得、慈善事業家となって日夜努力していると言う。頼三は篠原の高い志に共鳴し、親交が始まる。そして彼の援助のもと海外博覧会にする出品作品を作る。お蝶は篠原を未来の夫と心に描くようになる。作品ができたとき頼三は篠原邸を訪れ、遠慮なく家へ上がるが、障子越しに頼三は篠原と来客との会話を耳にし、篠原が頼三兄妹をだましており、お蝶を狙った金持ちにお蝶を差し出そうとしていることを知ってしまう。一方、お蝶は篠原から自分の事業の資金調達のために、ある有力者に身を捧げてくれと頼まれ、悩んだ末に死を決して家を出てしまう。頼三は篠原に裏切られた無念の思いと妹を失った悲しみの中で、この世にこの価値を認めるものなしとして、苦心の作品を庭石に叩き付けて割ってしまう。

「暁月夜」はこうした一連の作品の後に、書かれたのであった。

六　二十歳の一葉の恋愛観

一葉の小説に恋愛がめでたく成就した作品はない。「暁月夜」の直後に書いた「雪の日」の女主人公は親代わりに育ててくれた伯母の眼を盗んで恋人である小学校時代の教師と東京に駆け落ちして結婚をした。言わば恋を成就させている。しかし、結婚後の夫はつれなく、姪を案じつつはかなく死んだ伯母を偲んで悔恨の涙にくれるというもの。ハッピーエンドにはなっていない。ここで、一葉がこれまでに、恋とか結婚とかに関わるいかなる問題を見聞し、体験をしているかを振り返ってみよう。

1　両親の恋愛と結婚

一葉の父則義（幼名、大吉）は甲斐の国山梨郡中萩原村十郎原に天保元年（一八三〇）樋口八左衛門の長男として生まれた。家は中農であったが、村の慈雲寺の白巌和尚に学んで俊敏の誉れが高かったという。慈雲寺への途中の同村青南に古屋安兵衛という農家があり、やが

てその家の長女あやめ（後に、滝・滝子）という四歳違いの娘と恋仲になっていった。しかし、古屋家では二人の仲を許さなかった。その理由の一つは、嘉永五年（一八五二）九月、大吉の父が百姓惣代として村人のために水争いの解決を求めて江戸に出、老中阿部伊勢守に駕籠訴訟を起こして投獄されたということであった。村人のために命懸けで老中に直訴するほどの男で帰村したときは村人は感謝し喜び迎えたものの、八左衛門は訴訟事などを好む胡散臭い人と見られるようにもなっていった。その息子と娘との結婚は許せなかったのであろう。二人とも婚期が遅れていくばかりであった。そして、安政四年（一八五七）四月六日二人は江戸へ出奔した。　これは、大吉に山村で埋もれたくないという野心と、あやめが妊娠九ヵ月にもなってしまったという両方の結果であった。二人は父の友人で、農民の出ながら今は幕府直参の武士になっていた真下専之丞（当時蕃書調所調役、後には五千石の陸軍奉行並という大身に出世する）を頼った。真下は親切に迎え、二人は新所帯を持つことができたのであった。その後、父則義は真下の世話で武士への道を歩み、後に南町奉行所同心として明治を迎えている。母も長女ふじを出産後、ふじを里子に出して、大身の旗本稲葉大膳家の姫鉱の乳母に上がり、文久三年（一八六三）当時則義が仕えていた旗本菊池大助（伊予守隆吉）が大目付兼外国奉行となり、則義が公用人に抜擢されたのを機会に稲葉家を辞している。いわば夫婦共働きで武士への階段を上がった夫婦であった。二男三女に恵まれ、明治維新後則義は東京府庁に属官として勤務し、傍ら不動産を売買したり人に金を貸したりもしていたので、庶民レベルで言えば樋口家は内福で幸せな生活を営むことができたことからも、一葉の両親は恋を実らせ、まずまず幸せな結婚生活を送ったカップルであったと言えよう。しかし、明治二十年六月（一葉十五歳）父則義が警視庁を退職し、同月大蔵省の雇として就職した長兄泉太郎が十二月に肺結核で没し、二十二年に則義が事業の失敗に続いて病死してから樋口家の苦難が始まることになる。

2　姉ふじ（藤・藤子）の結婚

一葉の姉ふじは安政四年（一八五七）五月十四日の生れで、一葉が二歳になった明治七年十月に十七歳で当時軍医寮に勤務していた軍医副和仁元亀[31]と結婚した。元亀の父元利は元宇都宮藩の藩医であり、弟貞吉は後年大審院長[32]になっているくらいの家庭であるから、世間的に見ればふじにとって良縁であったと言えよう。しかし、この結婚は長く続かず、ふじの方から父に頼んで離縁してもらっている。理由は、まだ未成熟であったふじが夫の性的な欲求に応じ切れなかったためと言われている。[33]その後、樋口家に復籍したが、明治十四年十月、樋口家の近くに住んでいて、よく知り合っていた久保木長一郎と再婚している。長十郎は埼玉の農家の生まれであるが、姉はつが本郷三丁目で営む旅館岡崎屋に身を寄せていた。はつと仲が良かった一葉の母滝はふじを連れて岡崎屋へ出入りしており、そうするとうちにふじと長十郎も自然と親しくなったのであろう。明治十二年七月、長十郎は近所に住み、跡継ぎのいなかった久保木いせの養子になった。そして、二

年後ふじと結婚したのである。長十郎は無為徒食の放蕩者と見られていたが、父に勘当された一葉の次兄虎之助を「良く理解し、さふいふ青年が生きてゆく方法を、上手に説くことができたと考へられる」[34]一面をもっていた人なのであろう。久保木家は豊かではなかったが、父亡き後の樋口家と寄り添うように生活し、樋口家の人々の支えになっている。ただ、久保木夫妻の結婚は馴れ合いのような形のもので、ふしだらな関係、淫婦の所行として両親との間に一悶着があった。[35]その後、息子も生れ、夫婦仲もよく、樋口家とも睦まじく交際していたが、理想の結婚と言えるようなものではなかったのであろう。

3　広瀬ぶんの行状

次に、奔放な生きたを見せた広瀬ぶんを語らねばなるまい。ぶんは一葉の父則義の母ふさの弟広瀬伝兵衛の娘で、万延元年（一八六〇）の生れである。親戚関係で言うと一葉の父の従妹ということになる。最初の結婚に失敗し実家に戻るが、明治十一年十九歳のとき上京し、樋口家を訪ねて七歳の一葉に会っている。その後も東京に憧れ再三家出をし、その都度隣家に住む伯父の広瀬七重郎が連れ戻し、身を固めさせようと再婚させるが、逃げ帰ることを繰り返すううちに裁判沙汰にもなるような事件を起こしてしまった。ぶんは北野象次と再婚していたが、蚕種を売り歩く小宮山庄司と関係ができて離縁となった。小宮山はおぶんのために先妻と離縁した。ところがおぶんは小宮山に誘われるまま不倫を犯したことを後悔し、小宮山に隠れて北野との交際を重ねていた。明治二十四年四月十五日東八代郡一ノ宮村の大神幸祭のとき甲府柳町の旅館山形屋の二階で密会している現場を小宮山に発見され、北野は示談金百円の調達を求められ、そのうえ公衆の前でなじられることを恐れておぶんが態度を変えるのを見て、美人局まがいの恐喝詐欺として裁判所に提訴した。甲府裁判所の判決ではおぶんは有罪となり、同裁判所の二審でも一審と同判決だったので、東京控訴院に上告した。九月二十七日控訴院は一、二審の判決を認め、有罪（執行猶予監視、保護監察相当）となった。その結果、神田仲町一丁目五番地の旅館常総館に置かれ、樋口家が監督を引き受けることになった。二十五年一月常総館主人が変わったため浅草花川戸[36]に移り、監視換えを行い、骨董古道具店を営みながら人力車夫になった小宮山と同棲しているが、二十六年五月六日小宮山を残し、故郷山梨にいる伯父七重郎のもとに帰ってしまう。やがて、伯父の家のすぐ近くの雨宮熊次郎に嫁ぎ、昭和二十九年（一九五四）数え年九十五歳で亡くなった。前半生は波乱に富んだものであったが、後半生は穏やかなものであったのであろう。九十四歳のおぶんを訪ねた和田芳恵氏は「髪はうすくなっているが、禿げてはいない。皮膚に紫黒いしみが一面にあらわれ、眼やにがでていた。それを手拭で、押すように時々ふいていた。耳が凍傷のように少し傷んでいた。薄皮の肌に消えかけた色気がふしぎに漂うようなうつくしさであった。あとで五十代の、眼鏡をかけたおぶんの写真を見せてもらうことになったが、それをみなくとも美しい人とおもった」と書いている。また、一葉があまり早く本を読むので聞くと「私は一度に三くだりずついっぺんに読んでしまうと答え

た」と言ったこと、小宮山のことを聞くと「さあ知らないね」と答えたが、さらに「ほら、おばあさん、蚕の種商人の、小宮山という人のことですよ」と言うと、「あっ、知っている。……あの時のことは、みんな嘘だ」と答えたという。「どうして、女は、こうも、嘘つきなんだろうと思いながら（中略）虚栄心が、九十四歳のおぶんの体に、まだ、色気を残しているのだと思った」[37]と書き残している。

明治二十四年九月二十四日の一葉の日記には、広瀬ぶんの訴訟問題で七重郎が上京し、樋口宅を訪問したことが記されている。「おのれがめひなるものから、文こそよの淫婦にては有けれ。夫をかゆることはや六、七人にもなりぬ」という七重郎の言葉を書き残しているが、これには一葉自身も同感したことであろう。そして十九歳の娘ながらわが縁者に淫婦を見て愛欲の醜さを知ったのである。

4　半井桃水との関係

一葉は歌塾萩の舎の先輩田辺花圃が「藪の鶯」（明治二十一年六月）を出版して兄の一周忌法要の費用を捻出したことに刺激され、明治二十四年四月から妹邦子の友人野々宮菊子の紹介で『朝日新聞』の小説記者半井桃水の弟子になって、萩の舎での歌の勉強と並行して小説の勉強を始めている。桃水は早く妻を亡くし弟妹を引き取って生活していたが、まだ数え年で三十二歳の美男子だった。一葉は桃水の指示のままに頻繁に指導を受けているが、すぐに原稿料が貰えるようにはならなかった。しかし、桃水は文壇に一葉を送り出そうと言う意志もあって、二十五年の春同人雑誌『武蔵野』を創刊し、一葉に作品の発表の場を与えている。こうして、「闇桜」（創刊号・三月）、「たま襷」（二号・四月）、「五月雨」（三号・七月）の三編を活字にすることができた。この他に、桃水の紹介で明治二十五年四月に「別れ霜」を『改進新聞』に連載させてもらっている。[38]桃水は創作指導とともに発表の場も考え、新聞関係や有名作家への橋渡しなど、親切に面倒を見ていたのである。一葉の日記を読んでいくと桃水への恋心をはっきり汲み取れるし、友人間には桃水との間柄が怪しいという噂も立ち始めていった。また、野々宮菊子からは桃水の不品行の情報も伝えられた。ちょうどそのころ萩の舎では中島歌子師の母いくの病が重くなり六月三日に亡くなった。歌子から愛され、何度か養女にと望まれたほどの立場にいた一葉はいくの葬儀前後には慌ただしく萩の舎で過ごした。そして十日祭の日には親友の伊東夏子から桃水とのことで、「君は世の義理や重き、家の名や惜しき、いづれぞや、先この事聞はまし」と詰め寄られた。翌十四日、一葉は歌子を訪ねて終日話し込んだ。歌子は結婚の約束は無かったのかと問い、桃水は一葉を妻だと言い触らしている。あなたが認めるなら他人が諫めることではないが、そうでないなら交際しないほうがよいと言われた。一葉は師友の諫めに従って、十五日に桃水宅へ行き、師の君の家の内をとりまかなう者がいないから、これからは来られないと告げた。二十二日には借りた本を持参して、萩の舎で桃水との悪い噂が立ったので交際を立ちたいと言う心中を語っている。その後も完全に絶交したわけではないが、これまでとは違う関係になっていった。

5　渋谷三郎の訪問

「暁月夜」執筆を依頼される二カ月前の八月二十二日、一葉宅を渋谷三郎が訪問している。渋谷は一葉の両親が江戸に出て来たとき頼った郷里の大先輩真下専之丞（ましもせんのじょう）の妾腹の孫であった。渋谷家は町田（現在の東京都町田市原町田）で脇本陣「武蔵屋」を営んでいた家で、維新後は兄仙二郎が郵便局の局長をしており、三郎は姉の夫北島秀五郎の援助で東京専門学校に通っていた。一葉が三郎に初めて会ったのは松永政愛宅であった。松永も一葉の父も三郎の祖父真下の庇護を受けた間柄で親しくしており、松永の妻に一葉は裁縫を習いに通っていた。そこへたまたま真下の孫の三郎が訪問したのであった。これが縁で三郎は樋口家へもしばしば訪ねるようになった。一葉の父は三郎を見所のある青年と思い、将来一葉と結婚させたいと思って見ていたようである。一葉と妹邦子と三人で寄席に行ったり語り合ったりもしていたのである。ところが、明治二十二年七月十二日、事業に失敗し、失意のうちに一葉の父則義は没した。一葉は十七歳、邦子十五歳であった。死期が迫ったと感じた則義は三郎を枕元に呼んで奈津（一葉）の婿になって樋口家を継いでほしいと頼んだ。三郎はこれを承諾した。則義は安心して亡くなったが、いよいよ一葉の母滝から結婚の話が出されると、「我自身はいささか違存もあらず、承諾なしぬ」と言うので、母は喜んで、では知人の三枝さんを表立ての仲立ちに頼もうと言うと、「まずしばし待給へ。猶よく父兄とも談じて」と言って三郎は帰ったが、共通の知人佐藤梅吉を通して怪しく利欲に関わるようなことを言ってきたので破談になってしまったという経緯があった。世の多くの人々は樋口家の没落を見て、渋谷三郎が一葉を裏切ったと見ている。しかし、これは誤りではなかろうか。三郎は姉婿の援助を受けて、当時の日本人の学歴からみると大学（東大のこと）には及ばないが、ハイレベルの東京専門学校（早稲田大学の前身）にまで通った前途有為な青年であった。事実、翌二十三年には高等文官試験に合格し、検事、判事、秋田・山梨県知事、早稲田大学法学部長・理事、東北興行社長、報知新聞副社長等を歴任するほどの人物であったから、渋谷家では自慢の秀才息子であったろう。その青年を婿養子に出すとすれば、三郎の意思がどうあれ、渋谷家側としてはそれ相応の結納金を要求しても欲深な話ではないと私は考えるが、いかがなものであろうか。けれども、金銭にからんだ話が出るとその日の暮らしにも困っていた樋口家から見れば無情な言葉と受け取ったのも、これまた無理はない。結局、渋谷家側からの一方的な破談と受け取られる結果となったのである。しかし、三郎はそれ以後も則義の一周忌には訪ねているし、新年の礼も欠かさず、司法官として新潟に赴任するときも挨拶に来ている。その後も時おりは手紙も寄越し、樋口側も返事をし、それなりの交際は保っていたのである。その三郎が、夏休みで上京したと言って明治二十五年八月二十二日に立ち寄っている。三郎は一葉が小説を書いていることを激励し、小説出版の費用が必要なら立て替えてもいい、また坪内逍遙[39]なり高田早苗[40]なりへの紹介の労をとろう。半井とは浮評を受けないため交際を避けた方がいいなどとも言った。また、近眼だとい

うと、明日また来るから一緒に医者へ行こうとか、『都の花』に投書したら一冊送ってくれ、写真があったらくれないかなどと言って十一時ごろ辞去している。そして、翌日も大隈重信[41]、前島密[42]、鳩山和夫[43]を訪問した帰りだと言って立ち寄っている。

それから十日ほど後の、九月一日に一葉の母が知人の山崎正助方を訪ねると、渋谷との縁談が持ち出された。三郎を婿に世話をしてもいいし、嫁にやるのでもいいということだった。渋谷は樋口家と共通の知人山崎方へも立ち寄って、一葉との復縁を依頼して帰ったのであろう。しかし、母滝は断って帰ってきた。三年前の悔しさがそうさせたのであろう。一葉はその日長々と三郎とのいきさつを日記に記している。その日の日記の終りの部分に、「今この人に我依らんか、母君をはじめ妹も兄も、亡き親の名までも辱かしめず、家も美事に成り立つべきながら、そは一時の栄、もとより富貴を願ふ身ならず、位階何事かあらん。（中略）そは此人の憎くきならず、はた我れ我（が）まんの意地にも非らず。世の中のあだなる富貴栄誉うれはしく捨てゝ、小町の末我やりて見たく、此心またいつ替るべきや知らねど、今日の心はかくぞある」と記して、きっぱりと三郎との結婚に終止符を打っている。母が縁談を断ってきたとき、「世はさま〴〵なり」と言って一同が笑ったとも書いているが、一葉の心は単純ではなかったと思う。桃水への思いも捨てがたいが、今は正八位、月俸五十円の検事になり、親兄弟から自立した男として改めて求婚してきた三郎に母親ほど割り切った思いでは無かったと推測される。一葉の文名があがったので求婚してきたという人もあるが、一葉はまだこの時点では同人雑誌に三編、他の新聞に一編発表しただけで小説家としては駆け出しである。一方三郎は前途洋々とした検事となっており、良家の令嬢との縁談も望める立場にあった。その三郎からの求婚であった。一葉の心はさぞ混沌とした思いであったろう。だが、その気持ちを整理し、結婚を捨てて文学の道に生き、「小町[44]の末見てやりたく」と決心したのであった。

一葉は恋の成就の難しさを思い、結婚生活の不毛な例、肉欲の醜さを知ってしまった結果が、恋は醜くあさましいものという恋愛観を持つようになり、それが作品にも反映されているのではないかと推測されるのである。

七　王朝文学的色彩

屋木瑞穂氏は「樋口一葉『暁月夜』―古典文芸復興の機運のなかで―」[45]で、

優美な古典的修辞をちりばめた「暁月夜」については、従来「王朝文学的」世界への「後退」といった捉らえ方が多くみられた。ここで視野に入れたいのは、明治二十年代中葉は、復古的な時代思潮と相俟って、出版文化の上でも古典叢書の興隆といった現象が顕著にみられた古典復興の時期であったということである。

と述べている。一葉は萩の舎で和歌ばかりでなく古典も学んでおり、後年は自宅で安井哲子・野々宮菊子・穴沢清次郎その他に『源氏物語』『徒然草』『古今和歌集』などを教えていることが日記に書かれて

いることからも、一葉の古典文学の素養はかなりのものであったろう。[46]しかし、小説の師とした半井桃水からは新聞の読者に好まれるような趣向内容のものをという指導で、文章についても和文めかしいからもっと俗調になどと言われていた。とは言え、小説に志して一年、小説に対する目も肥えて行ったことであろう。そして、二十五年の春から雑誌や新聞に小説を発表するようになり、「うもれ木」のように幸田露伴の「風流仏」[47]「一口剣」[48]「五重塔」[49]などの影響を受けた作品が生まれている。慈善事業家の仮面を被った男と彼に操られた職人気質の男とその妹の悲劇を描いた「うもれ木」では、社会の不正義を追及する新しい作品の世界が開かれていった。それが「暁月夜」では古典回帰と評されたわけである。

香山家の令嬢一重が姉妹一の美女なのに縁談に耳を貸さず、一生独り住みを願っているというわさを聞いた文学書生の森野は、『源氏物語』の「末摘花」[50]を連想して、「慈悲ぶかき親の勿体をつけたる拵へ言かも知れず、それに乗りて床しがるは、雪の後朝の末つむ花に見参まへの心なるべし」と思いつつも、一重を知りたくて、庭男として香山家に住み込むのである。そして三人の令嬢のうち一重に対する母親の物言いがどこやら苦くつらいもののように感じた森田は、一重の亡き母を桐壺帝に愛された桐壺の更衣と重ね合わせ、奥方の妬みで肺病になって亡くなった人の忘れ形見ゆえに、緑にもつけずに生殺しにしているという疑惑を持つ。継子いじめの物語には『落窪物語』などが有名だが、森田は気の毒な姫を救い出す君達たらんとするのである。そして、一重に迫ることにより一重の独身志向の謎が解けていくのである。

なお、付け加えれば、一重と森田が二十日月の霞む中で一重の告白を聞く場面に「似たりや弘徽殿の細殿口、敏が為には若くものなき時ぞかし」と光源氏が朧月夜の君[51]と巡り合う場面を連想させている。そして、小説は「これより姫はいかになりけん、さても敏はいかになりけん。つれなく見えし有明の、月の形見を空に眺めて、『暁ばかり』と叫きけんか知らず」と結ばれているが、この部分も『古今集』（巻十三・恋三）の「有明のつれなく見えし別れより暁ばかり憂きものはなし」（『古今集』壬生忠岑）を踏まえた言葉が綴られ、王朝物語臭が強く感じられる。

平田禿木がすでに指摘しているが、滝藤満義氏も「『対髑髏』あたにがヒントをあたえているのではなかろうか」[52]と改めて触れている。「暁月夜」は「対髑髏」などにヒントをえて、古典を踏まえた技法によって綴った作品であると言えよう。

また、屋木氏は前記論文中で「『近時続出せし墨染小説、一名尼小説』（「こわれ指輪」、明治二十二年四月『国会』）という石橋忍月の同時代評言にみられるように、世を厭う美女の物語は文壇の流行現象でもあった」と指摘しているのも参考になろう。

八　作品に描かれた時代

「暁月夜」はほぼ一葉と同時代の話と考えられる。一重の両親が恋

仲を割かれたとき、すでに香山家は華族になっていたようであるし、間もなく生まれた一重は二十歳になっている。明治五年生れの一葉は、いま二十歳で自分と同じ年頃の娘の話を書いていると見て良いだろう。

九　香山家の所在

「暁月夜」はすべて香山家を舞台としている。一葉は熟知している地域を舞台として小説を書いているが、この小説もその例に漏れていない。「香山家ときこえしは……行く水の流れ清き江戸川の西べりに、和洋の家づくり美は極めねど、行く人の足を止むるる庭木のさまざま、翠色した　る松にまじりて紅葉のあるお邸と問へば、中の橋のはし板とゞろくばかり」と紹介されている。

近時、「江戸川」というと、東京の東部と千葉県との境を流れ東京湾に注ぐ川、「虎さん映画」で知られた芝又の帝釈天の東を流れる川を思うけれども、「暁月夜」でいう江戸川とは井之頭の池を源として杉並区、中野区、新宿区、文京区、千代田区を流れ、両国橋の近くで隅田川に注ぐ川の中流をいう。後楽園あたりから下流は神田の町外れを流れているので神田川と呼ばれるようになったのであろう。もっとも、最近の地図では杉並あたりの流れにも神田川と表示されている。

『全集樋口一葉　第一巻　小説編一』の「暁月夜」の脚注[33]には「井の頭弁天の池に発し、目白台の下の関口に至る川。二股に分れ神田上水や神田川になる」とある。関口は徳川綱吉の母桂昌院ゆかりの護国寺から牛込（現在、新宿区内）方面に通じる音羽（おとわ）通りが神田川に突き当たるあたりの町で、現在は地下鉄江戸川橋駅があり、少し上流に江戸川公園があって、江戸川の名を残している。

ただ、小説の中の香山家は「江戸川の西べり」にあるというから、小石川区（現在、文京区）側ではなく牛込区（現在、新宿区）側にあったと見てよいだろう。しかも、中の橋の近くにあるようである。中の橋（中之橋）は現在の地番表示で文京区水道一丁目三番から対岸の新宿区新小川町の間に架かっている。中の橋から下流へ二百メートルほど川に沿って歩き、左手に折れて徳川家康の母の菩提寺である伝通院へ上る安藤坂の中ほどに一葉が通っていた歌塾萩の舎があった。一葉は安藤坂をわずかばかり下った所を流れる江戸川の対岸、牛込区新小川町（現、新宿区）に香山家を設定したと考えて良いだろう。

なお安藤坂は江戸川橋から一キロほど下流になり、下流に向かって川が大きく右に曲がっていて、大曲の名がある。当時は、大曲から上流の江戸川橋方向の川沿いに西江戸川町、大曲から下流の川沿いに江戸川町が小石石川区側にあった。だから、川の名も江戸川町あたりまでは江戸川と呼んでも良いのであろう。因みに、大曲から五百メートルほど下流左岸に旧水戸徳川家江戸屋敷の庭園であった後楽園や後楽園球場などがある。

十　結び

一葉は明治二十五年の春から、小説を雑誌・新聞に掲載するようになった。いずれも、自分の熟知している町を舞台としていた。「暁月

夜」は萩の舎の前の安藤坂を三百メートルほど下った先を流れる江戸川の風光明媚な対岸を眺めて、そこに華族香川家の美邸を設定し、生涯独身を願う美しい令嬢がいると考えた。そして、美人という噂を聞いて今様末摘花かと疑う書生がその謎を解くという構想の作品に仕上げたのであった。

「暁月夜」は王朝的色彩があるとやや批判的な批評もあるが、山田有策氏が「時代風俗を折りこみ、会話なども円滑になり、写実的な傾向も示している。『経つくゑ』と共に過渡期を示す作品といってよい」[54]と述べられているように、一葉の作家としての成長の過程を示す作品として鑑賞したいと考えられよう。

（注）

1　明治時代の代表的な出版社。小学校の教科書の出版で有名。わが国最初の商業文芸雑誌『都の花』（明治二十年～二十六年）を発行した。

2　中島歌子主宰の和歌の塾。門弟には、鍋島侯爵・前田侯爵などの華族や名家の夫人・令嬢がおり、上流・中流階級の女性が多かった。

3　本名は、龍（たつ）（龍子）。歌人・小説家。一葉より四歳年上。桜井女学校、明治女学校に学んだ後、東京女学校専修科を卒業。当時の女性としては大変な教育を受けていた。三宅雪嶺と結婚してからは「三宅花圃」と呼ばれる。父田辺太一（蓮舟）は幕臣であったが、学識もあり、新政府でも外務少丞、大書記官などを経て元老院議官などの要職を歴任している。

4　『都の花』第九五号（明治二十五年十一月二十日）、第九六号（十二月四日）、第九七号（十二月十八日）の三回に分けて発表された。

5　麹町区（現、千代田区）下二番町六十番地にあった。

6　上野公園内に設けられたわが国最初の公立公共図書館（東京図書館、現称国立国会図書館支部上野図書館）。一般には上野図書館の名で親しまれていた。

7　明治二十五年十月二十一日の一葉の日記。以下、本稿中で月日がわかる一葉日記の引用については注記を省略する。

8　一葉自身を指す。

9　佐佐木弘綱夫人、光子。竹柏園の号は息子佐佐木信綱が継承する。

10　『都の花』第七四号にも「松の嘆息」を書いている。

11　和田芳恵著『一葉の日記』（筑摩書房・昭和三十一年八月刊）

12　己巳子。幕末の甲府代官荒井清兵衛の次女。

13　『朝日新聞』の小説記者。一葉の小説の師。

14　文芸雑誌。ヨーロッパの写実主義の影響を受けた新進作家たちに対抗して、失地回復を目指して半井桃水が計画主宰したが、明治二十五年二月二十三日、四月十七日、七月二十三日に三編発行しただけで、三号雑誌に終わった。

15　東大哲学科出身の評論家。政教社を興し『日本人』『日本及び日本人』などのメディアによって国粋主義的な評論活動をした。

16　和田篤太郎が明治十一年に創業した出版社。明治二十二年一月文芸雑誌『新小説』を創刊。翌年廃刊するが、二十九年七月に『新小説』を再刊し、明治・大正期を代表する雑誌となった。晩年の一葉に寄稿の依頼があったことが日記に見える。昭和八年には『一葉全集』（五

冊・春陽堂文庫）が出版されている。

17 甲府市で発行していた『甲陽新報』の主幹野尻利作の依頼で執筆し、七八号から八四号（明治二十五年十月十八日～二十五日）まで連載された。

18 神田区（現、千代田区）三崎町三丁目一番地。

19 明治十八年に木村熊一、鐙子が創設した学校。巌本善治（二十五年より校長）の努力で明治二十年代に最盛期をむかえる。幸田延、星野天知、島崎藤村、北村透谷なども教鞭を執る。明治四十一年閉校。

20 近藤賢三の後を巌本善治が引き継いだ日本初の女性啓蒙雑誌。明治十八年七月より三十七年二月まで発行。巌本の妻（筆名、若松賤子）、田辺花圃、中島（岸田）俊子、萩野吟子ら女性の執筆陣が活躍した。

21 本名、慎之輔。農科大学卒。明治二十三年明治女学校に迎えられ、『女学雑誌』にかかわるとともに『女学生』を創刊、主筆となる。二十六年創刊の『文学界』の編集、経営に当たった。

22 野口碩編 『樋口一葉来簡集』（平成十年十月・筑摩書房刊）「田辺（三宅）龍子」の部解説。

23 『山形大学紀要（人文科学）』（昭和二十九年三月発表）

24 一葉の小説に登場する女性を「谷中の美人」系の女性と「にごりえ」系の女性に分けることは松坂俊夫氏が論文「一葉小説構想論序説」（昭和三十八年）によって提示されたものである。（同論文は改題・増補・加筆され「一葉小説の構想とその展開」として『樋口一葉研究』（教育出版センター昭和四十五年九月刊）に収められている。）「谷中の美人」とは、一葉が書き残した原稿の断片「棚なし小舟（その二）」から出ており、松坂氏は「『谷中の美人』系の構想は、ヒロインが孤児で、かつては相応な身分であったものが零落し、婚期になっても独身を続けており、その恋は破綻に終り、主要人物の親たちの間には浅からぬ関係があるということになり、この原型を基に、ある要素が欠け、ある型の要素があらたに加わるなどして『谷中の美人』系の作品は成立していると思われる。」としている。

25 明治二十三年一月発表。

26 明治二十六年三月二十一日付で平田禿木は一葉に宛てて「今日はからずも参堂いさゝか君が風流に接するを得し事深く御礼申上候 御作暁月夜店頭にて、一冊求め只今灯下に拝読いたし一重様の御心の程そゞろ哀れに覚え候 つれつなく見えし有明の月の形見を空に眺めてと危ふき処にとゞめ給ひし御筆の跡心にくゝ思はれ候ふ。」と書き、さらに「うもれ木」の露伴調に共鳴し、一葉を「対髑髏」の主人公お妙になぞらえ自分をお妙と出会う旅の青年に見立てて交誼を求め、共に文学の道に尽くすことを希望しているという手紙を送っている。（樋口悦編『一葉に与えた手紙』・今日の問題社・昭和十八年一月刊）

27 『「文学界」とその時代・下』・明治書院・昭和三十五年一月刊）

28 新典社・昭和五十七年十一月刊。

29 伊東夏子（結婚して、田辺姓）著。潮鳴会・昭和二十五年一月刊。

30 帝国大学の中の一つの分科大学。東京大学医学部の前身。

31 軍医の階級の一つ。森鷗外も明治十四年七月東大医学部を卒業し、同年十二月陸軍軍医副として東京陸軍病院に勤務している。

32 大審院は現在の最高裁判所に当たる。

33 注11と同じ。

34 注11と同じ。

35　塩田良平著　『樋口一葉研究』（第二章「一葉の生立」二「長女ふじと久保木長一郎」中央公論社・昭和三十一年十月刊）

36　現在、東京都台東区にある浅草寺と墨田川との間にある町。

37　「消え残る色気」（『新部明』昭和二十九年一月発表）

38　明治二十四年の初めごろから十八日まで連載される。関良一氏は「三月三十日以後、おそらく四月初めに掲載開始、全十五回、四月十八日ごろ掲載終了」（旧筑摩書房版『一葉全集』所載「一葉書誌」）とされ、野口碩氏は三月三十日より四月四日の間に掲載が開始され「完了は『につ記』の四月十九日の記事によって、四月十八日頃であることは疑いがない」（『樋口一葉全集』第一巻の補注）と書いている。

39　評論家・小説家・劇作家『シェークスピア全集』の完訳完成者。東京専門学校・早稲田大学教授であった。

40　教育者・政治家。東京専門学校の創立に参加。後に早稲田大学総長。衆議院議院当選6回、後に貴族院議員。

41　政治家・教育者。幕末には尊王攘夷派として活躍、明治になっては参議。以後、伊藤、黒田、松方内閣の閣僚を勧め、明治三十一年と大正三年の二回首相として内閣を組閣する。一方、明治十五年には東京専門学校（後の早稲田大学）を創立した。

42　明治政府の官僚。郵便制度度の基礎の確立者。明治十九年から二十三年まで東京専門学校校長。

43　外務省勤務を経て東大教授。後、衆議院議員に選出され、議長となる。早稲田大学総長も歴任。鳩山一郎元首相の父。

44　小野小町。平安時代中期の歌人、『古今集』の六歌仙の一人。絶世の美女と言われるが事跡は不詳。晩年は零落したという伝説があり、一葉の言葉も小町の晩年の悲惨さを踏まえた言葉。

45　『解釈』（平成十四年四月、三・四月合併号）発表。

46　拙稿「一葉の弟子」（『解釈』・昭和六十年三月）発表。

47　明治二十二年九月発表。

48　明治二十三年八月発表。

49　明治二十四年十一年～二十五年三月発表。

50　『源氏物語』の「末摘花」の巻に登場する女性。故常陸宮（ひたちのみや）の姫君で、光源氏は乳母の娘から姫君の噂を聞き、心引かれて通うようになるが、雪の朝、雪明かりの中でその姫が不器量で、しかも高く伸びた鼻の先が真っ赤なのを見て落胆するが、父を亡くして零落している姫を以後も世話をしようと決心する。

51　光源氏の母桐壺の更衣のライバル弘徽殿の女御の妹。右大臣の姫で、弘徽殿の女御の息子（源氏の異母兄で東宮）の妃と予定されていた身ながら、光源氏と不義の関係を結ぶ。

52　「一葉初期小説論―「闇桜」から「暁月夜」まで」（『千葉大学人文研究』第25号・平成八年三月）

53　小学館・昭和五十四年十一月刊。山田有策脚注。

54　注53と同じ。